

フランス語とイタリア語における 部分冠詞の分布について

藤田 健

Distribution of the Partitive Article in French and Italian

Takeshi FUJITA

要旨： The partitive article is peculiar to the French and Italian article system. We examine the syntactic distribution of the partitive article in the corpus (a French text and its Italian translation, an Italian text and its French translation, and the French and Italian translations of a Spanish text), taking into account the distributional correspondence between the partitive article and other articles, the null article included. We conclude that the French partitive article is a true article, while the Italian partitive article is considered to be a quantifying determiner. It is also shown that the partitive article has a close connection with other determiners, especially with the null article in Italian.

キーワード： partitive article, French, Italian

0. 序論

冠詞という文法カテゴリーを有する言語において、この要素は名詞句において極めて重要な文法的役割を果たす。ロマンス諸語に属するフランス語とイタリア語は、英語やドイツ語に見られる定冠詞・不定冠詞の他に、部分冠詞という独自の要素をもつ点で特異であると言える。それぞれの言語においてこの部分冠詞について様々な観点から研究が進められているが、言語間の対照的視点からの研究はあまり進んでいないのが現状である。

本稿では、フランス語とイタリア語の冠詞体系を対照的に考察すべく、部分冠詞の分布を詳細に検討し、他の冠詞との対応という点に焦点をあてて分析を進めていく。それぞれの言語における部分冠詞が他言語でどのような形式によって表現されるかを観察することによって、両言語の部分冠詞の相違点が明らかになる。対照の際に、冠詞をはじめとする決定詞を全く伴わない無冠詞名詞句も考察の対象とし、無冠詞を他の冠詞と対等の地位を占める要素として扱う。これにより、定冠詞・不定冠詞という

二項対立、あるいは定冠詞・不定冠詞・部分冠詞という三項対立での見方ではとらえられない冠詞の機能分化について、新たな視点を提示したい¹。

1. 両言語の冠詞体系

1. 1. フランス語

1. 1. 1. 冠詞のカテゴリー

多くの記述文法や論考において、フランス語は三種類の要素からなる冠詞体系をもつとされている。すなわち、西ヨーロッパの諸言語に一般的に見られる定冠詞・不定冠詞に加え、部分冠詞というカテゴリーが設定される²。

定冠詞の機能は、発話者(*locuteur*)と対話者(*interlocuteur*)のいずれにも既知である人やモノを指示する名詞の前に置かれるのが基本だが、種(*espèce*)・カテゴリーを対象とする用法もある(*Grevisse 1993 :865*)。前者の用法は照応的(*anaphorique*)であり、定冠詞の歴史的起源である指示形容詞の機能を継承している。これに対して、二つ目の用法は一般化(*généralisant*)の機能であり、現代のフランス語が獲得したものである(*Wagner et Pinchon 1991 :94*)。定冠詞は定(*défini*)³という意味以外には何らの意味的要素も含まないため、指示される対象が明確に同定されるという条件が満たされれば、あらゆる場合に使用可能である(*Martinet 1979 :41*)⁴。定を示す要素としては、他に所有形容詞や指示形容詞が挙げられるが、これらと定冠詞が異なるのは、定冠詞は指示対象の拡張(*extensité*)の境界を定めるという量化(*quantifiant*)の機能しかもたない中立的な要素であるのに対し、他の二つの要素は特徴づけ(*caractérisant*)という別の機能も併せ持っているという点である(*Leeman 2004 :63*)。

不定冠詞については、注記すべき点がある。英語やドイツ語とは異なり、複数形が存在するのである。単数形については、他言語にも一般的に見られる特徴として数詞の「1」を起源としている。複数形の形態は、部分を表す前置詞«*de*»と定冠詞を組み合わせたものであり、その機能は、具体的な数が明確に示されない複数を表わすことにある。不定冠詞は、既知のもの、同定されたものとしては提示されていない人やモノを指示する名詞の前に置かれ、単数形に限って定冠詞と同様に総称的な価値をもつことがある(*Grevisse 1991 :868-869*)。フランス語では、不定冠詞は定冠詞と異なり、個別化(*particularisant*)の価値を獲得したため、物質名詞や抽象名詞の前に置かれるこ

¹ 本研究は、平成24年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) (課題番号22520381)による研究成果の一部である。本稿の執筆にあたり、査読者から大変有益なコメントや誤り・不適切な表現の指摘を数多くいただいた。ここに深く謝意を表するものである。

² このような見方はフランス語の冠詞の分析において支配的なものであり、*Grevisse(1993)*, *Wagner et Pinchon(1991)*, *Leeman(2004)*の他に、*Deloffre et Hellegouarc'h(1988)*, *Hollerbach(1994)*, *Judge and Healey(1995)*, *Price(2003)*も同じ立場に立つ。*Martinet(1979)*は部分冠詞に関して、部分を表す«*de*»と現働化詞(*actualisateur*)である定冠詞に分ける見方を提示している(p.45)が、基本的な考え方は共通していると言える。

³ 「定」とは、ある要素の存在が既に確立されていることを指す(*Leeman 2004 :59*)。一般化も定の機能の一つであると考えられる。

⁴ *Martinet(1979)*は、冠詞を現働化詞というカテゴリーに属するものとしてとらえている(p.41)。現働化とは、ある要素について現実性を喚起する作用を指し、その作用を行う要素が現働化詞である。名詞の場合は冠詞をはじめとする決定詞(*déterminant*)が現働化詞である。

ともある(Wagner et Pinchon 1991 :97)。不定冠詞複数形は、複数という概念は表すもののそれは弱い性質のものであり、場合によっては「1」という数を排除しない(Leeman 2004 :139)。

部分冠詞は、その機能の点では、数えられない名詞の前に置かれる不定冠詞であると言え、不定の量を示すのに用いられる(Grevisse 1991 :869)。Martinet(1979)は、その形態及び意味的価値から、部分冠詞と不定冠詞複数形を一つのカテゴリーとしてとらえ、部分詞« de »と現働化詞の組み合わせられた要素であると分析する(p.45)。この見方は、通常のフランス語の冠詞のカテゴリー化とは異なるものであるが、Leeman(2004)においても同様の議論が展開されている。本稿ではこの見解に従い、今後いわゆる部分冠詞と不定冠詞複数形が同一のカテゴリーに属するという立場をとり、そのカテゴリーを部分冠詞と呼ぶこととする。

1. 1. 2. 無冠詞

フランス語においては、無冠詞名詞句の生起はかなり制限されていると言える⁵。Martinet(1979)は、無冠詞名詞句、すなわち現働化詞を伴わない名詞は現働化されていないのではなく、現働化詞以外の手段、すなわち文脈や統語的環境によって現働化されていると説く(p.45)。Deloffre et Hellegouarc'h(1988)は、冠詞を伴わない名詞は一般化を超えた無限の拡張を表すものであるか、固有名詞のようにその特性上現働化する必要がない場合であるとする(p.139)。

この現働化という観点からは、無冠詞は[－現働化]という特徴付けができる。これは、不定詞が[－時制]と特徴づけられるのと同じ手法に基づくものである。本稿では、不定冠詞と他の冠詞との対応関係を考察する上で、[－現働化]も名詞の指示対象を決定する機能の一つであると考え、無冠詞を冠詞体系の中に組み込むこととする⁶。

1. 2. イタリア語

1. 2. 1. 冠詞のカテゴリー

イタリア語も、フランス語と同様に三つのカテゴリーからなる冠詞体系をもつと考えられている。すなわち、定冠詞・不定冠詞・部分冠詞である。

Andorno(1999)によると、定冠詞は、話者と聞き手(ascoltatore)が知っている、あるいは同定可能(identificabile)であると話者(parlante)が認識している、定の指示を持つ名詞に伴う(p.35)。既知、もしくは同定可能である理由としては、本質的(intrinseco)なもの、テキストによるもの、語用論的なものがあげられている。またこれとは別に、個体ではなく、クラス全体を指示する名詞にも伴う。Sensini(1997), Serianni(1997), Dardano and Trifone(1997)も基本的に同じように定義している。

⁵ Grevisse(1991)は、フランス語において普通名詞が冠詞を伴わない場合を、1)特定の統語的機能を持つ場合、2)特定の語の語彙的特性による場合、3)複数の名詞を列挙する場合、4)慣用句、5)動詞を伴わない名詞文、に分ける。1)の統語的機能とは、a)名詞に後置される同格句、b)属詞、c)呼びかけ、d)別の名詞の特徴を表す補語、の四つに分類する。4)の慣用句において特に顕著なのは、動詞の目的語として動詞句を形成するものと、前置詞の目的語として前置詞句をなすものである(pp.875-877)。

⁶ この見方は、例えば生成文法の枠組みに従うと、決定詞の主要部の位置をゼロ要素 φ が占めているととらえることができる。ゼロ要素は、形式上は空であるが意味的には独自の機能を持ち、顕在的要素と範列関係(rapport paradigmatic)をなすため、両者は全く対等な統語的ステイタスを有することになる。

不定冠詞に関しては、フランス語の文法において一般的に見られる単数形と複数形があるという見方はされず、単数形のみからなると考えられている。Andorno(1999)は、不定冠詞は、聞き手が知らないあるいは同定できない、不定の指示を持つものとして話者によって提示される名詞に伴うとしている(p.36)。指示対象は特定の(specifico)個体でも不特定の個体でもよい。また、クラスに属する全ての個体を指示することも可能で、この場合には普遍量化詞(quantificatore universale)として機能しているとする。このような見方は、Sensini(1997)等他の文法においても共有されている。

部分冠詞については、フランス語の伝統文法とは異なり、単数形と複数形があると考えるのが一般的である。Dardano and Trifone(1997)によると、部分冠詞単数形は、単一の対象ではなく一定の量の物質を表す名詞(nomi massa)とともに用いられ、抽象的な概念を表す名詞とともに用いられるのは限られる。複数形は、イタリア語には存在しない不定冠詞の複数形に対応するものとしている(p.159)。本稿がフランス語の不定冠詞複数形を部分冠詞として扱うのは、こういった見方と合致したものである。Sensini(1997)が部分冠詞と不定冠詞との親縁性は明白なものである(p.73)としているように、部分冠詞と不定冠詞を関連付けて捉える視点は他の文法にも共通している。ただし、不定冠詞と異なるのは部分冠詞が使用される頻度であり、部分冠詞が生起可能な環境において 1.2.2 で述べる無冠詞となる場合が少なくない。Sensini(1997)は、部分冠詞が最も生起しやすい統語環境は直接目的語で、次いで主語となり、間接目的語や前置詞の目的語では使用がそれ程一般的ではないとする(p.73)。この点は、基本的に使用が義務的なフランス語の部分冠詞とは異なっていると言える。

以上の議論から、部分冠詞の使用頻度に差が見られるものの、フランス語とイタリア語の冠詞体系そのものに基本的な違いはないと言える。

1. 2. 2. 無冠詞

イタリア語の無冠詞名詞句は、フランス語におけるそれよりも使用範囲が広いと言える。Renzi et al.(2001)は、単数形では、物質名詞や物質名詞として扱うことのできる抽象名詞の場合に、特定のでない不定の名詞が無冠詞で生起できるとしている(pp.392-394)。特に直接目的語の場合に頻繁に見られ、動詞に後続する主語の場合にも観察される。動詞に先行する主語の場合には、無冠詞はまれである⁷。

(1) a. Preferite burro o margarina?

より好みますか バターをあるいは マーガリンを

b. Si è versato latte.

こぼれた 牛乳が

⁷ 名詞がある種の修飾要素を伴う場合には、動詞の前でも無冠詞で生起することがある。

Latte di questa qualità è raro.

牛乳は この性質の 珍しい

これは、後述する複数形の場合も同様である。

Amici così gentili sono sempre graditi.

友人たちは これほど親切な ~だ いつも ありがたい

数えられる名詞の場合には、特殊な文体を除いて単数形で無冠詞が生起することはない⁸。

複数形では、やはり特定のでない不定の名詞が、i)動詞に後続する主語、ii)直接目的語、iii)前置詞の目的語のいずれかである場合に無冠詞となりうるとRenzi et al.(2001)は述べている(pp.388-389)⁹。

(2) a. Ci sono ancora giornali in edicola a quest'ora.

～がある まだ 新聞が 売店に この時間には

b. Mi ha regalato rose.

私に 彼は贈った 薔薇を

c. Lavoravamo per committenti occasionali.

私たちは働いていた 時々ある発注者のために

動詞に先行する主語の場合には、不定名詞句は高度に文語的な文体においてのみ許容される。

上記の議論をもとにすると、数えられる要素を指示する名詞の場合、単数形では冠詞の生起が義務的であるのに対し、複数形では無冠詞名詞句が比較的広く観察されると言える。言い換えると、単数形名詞を限定する義務性が高い不定冠詞と複数形名詞を限定する義務性が低い部分冠詞はその機能が異なっているということである。

1. 3. 両言語における冠詞体系の総括

以上の考察から、フランス語とイタリア語の冠詞体系は以下のように示される。

定冠詞		不定冠詞	部分冠詞		無冠詞	
単数	複数	単数	単数	複数	単数	複数

このように、フランス語とイタリア語は、部分冠詞も含めて共通の冠詞体系を有している。伝統文法における分類をそのまま用いると、両者の共通性が捉えられないという問題が生じるので、本稿では上の分類を採用する。次節以降では、冠詞体系を共有する両言語において、部分冠詞が同じ機能をもつのか、それとも相違点が見られるのかという点に着目して分析を進めていく。

⁸ 単数形の数えられる名詞が修飾要素を伴った重い(pesante)名詞句として動詞より前に置かれた直接目的語である場合、無冠詞で生起することがあるが、文語的なスタイルである。また、この条件を満たさずに主語や動詞に後続する目的語として無冠詞で生起する例も見られるが、古典的な文体に限られる(Renzi et al. 2001:pp.390-391)。

⁹ Maiden and Robustelli(2000)は、部分冠詞が用いられる場合と無冠詞が用いられる場合で意味が異なってくる例をあげている(pp.76-77)。

- a. Dava del lavoro ai ragazzi. b. Dava lavoro ai ragazzi.
彼は与えた(部分冠詞) 仕事 少年たちに 彼は与えた 仕事 少年たちに
「彼は少年たちに仕事を与えていた。」 「彼は少年たちをやとっていた。」
- c. Dice delle bugie. d. Dice bugie.
彼は言う(部分冠詞) 嘘 彼は言う 嘘
「彼は嘘を言っている。」 「彼は嘘つきだ。」

部分冠詞が用いられた a,c の場合には名詞によって指示される実体を示すのに対し、無冠詞の b,d の場合には名詞によって指示される概念に焦点があてられる。

2. 部分冠詞の分布

本節では、それぞれの言語における部分冠詞の分布を観察する。主語・直接目的語等の文法機能ごとに、部分冠詞がどの程度の割合で生起するかを示し、その特徴を記述する。使用するテキストは、アンドレ・マルロー作「人間の条件」(フランス語作品)の原典とイタリア語訳、イタロ・カルヴィーノ作「木のぼり男爵」(イタリア語作品)の原典とフランス語訳、アルトゥーロ・ペレス・レベルテ作「アラトリステ I」(スペイン語作品)のフランス語訳とイタリア語訳である。

2. 1. フランス語における分布

まず、フランス語における部分冠詞の分布を観察する。「人間の条件」のフランス語原典における分布は以下の通りである。

(3) フランス語原典(人間の条件)における部分冠詞の分布

	合計	複数	単数
主語	67	66	1
倒置主語	43	37	6
目的語	210	165	45
前置詞句	116	111	5
属詞	40	34	6
名詞文	76	67	9
その他	14	11	3
総計	566	491	75

次に、「木のぼり男爵」のフランス語訳における分布を見る。

(4) フランス語訳(木のぼり男爵)における部分冠詞の分布

	合計	複数	単数
主語	55	54	1
倒置主語	35	34	1
目的語	358	332	26
前置詞句	177	174	3
属詞	44	37	7
名詞文	29	26	3
その他	30	29	1
総計	728	686	42

最後に、アラトリステのフランス語訳における分布は以下の通りである。

(5) フランス語訳(アラトリストテ)における部分冠詞の分布

	合計	複数	単数
主語	18	18	0
倒置主語	8	8	0
目的語	107	99	8
前置詞句	75	68	7
属詞	17	16	1
名詞文	14	14	0
その他	5	5	0
総計	244	228	16

上記3テキストを集計すると以下のようなになる。文法機能ごとに全体に対する割合も示す。

(6) フランス語テキストにおける部分冠詞の分布の集計

	合計	複数	単数
主語	140 (9.1)	138 (9.8)	2 (1.5)
倒置主語	86 (5.6)	79 (5.6)	7 (5.3)
目的語	675 (43.9)	596 (42.4)	79 (59.4)
前置詞句	368 (23.9)	353 (25.1)	15 (11.3)
属詞	101 (6.6)	87 (6.2)	14 (10.5)
名詞文	119 (7.7)	107 (7.6)	12 (9.0)
その他	49 (3.2)	45 (3.2)	4 (3.0)
総計	1538 (%)	1405 (%)	133 (%)

それぞれに対応する例は以下の通りである。

- (7) a. ...des étoiles s'établirent dans leur mouvement éternel....
星(部分冠詞)が 現れた ~の中に その永遠の運行 (主語)
- b. ...il y avait encore des embarras de voitures...
あった まだ 車の混雑(部分冠詞)が (倒置主語)
- c. ...les cordes...donnaient de la force.
縄が 与えていた 力(部分冠詞)を (直接目的語)
- d. On peut s'arranger avec des hommes des sections de combat...
折り合いをつけることができる ~と 戦闘班の連中(部分冠詞)
(前置詞の目的語)
- e. ...ce sont des idées d'homme...
それは ~である 男の考え方(部分冠詞) (属詞)

f. Des lumières de plus en plus nombreuses...

ますます増える光 (部分冠詞) (名詞文)

g. Combattre, combattre des ennemis qui se défendent, des ennemis éveillés !

戦うのだ 抵抗する敵と 目を覚ました敵 (部分冠詞) と (同格)

(6)に示された結果から、以下のことが観察される。まず直接目的語と前置詞の目的語が占める割合が高く、この二つの文法機能が全体の三分の二程度を占める。また、割合の差は見られるものの、あらゆる文法機能において部分冠詞が用いられている。更に、複数形と単数形を比較してみると、単数形における直接目的語の比率の高さが顕著である。

2. 2. イタリア語における分布

次に、イタリア語における部分冠詞の分布を観察する。「木のぼり男爵」のイタリア語原典における分布は以下の通りである。

(8) イタリア語原典(木のぼり男爵)における部分冠詞の分布

	合計	複数	単数
主語	5	5	0
倒置主語	5	3	2
目的語	57	51	6
前置詞句	9	8	1
属詞	4	4	0
名詞文	1	1	0
その他	3	3	0
総計	84	75	9

次に、「人間の条件」のイタリア語訳における分布を見る。

(9) イタリア語訳 (人間の条件) における部分冠詞の分布

	合計	複数	単数
主語	4	4	0
倒置主語	22	21	1
目的語	54	40	14
前置詞句	10	8	2
属詞	2	2	0
名詞文	5	5	0
その他	4	3	1
総計	101	83	18

最後に、アラトリステのイタリア語訳における分布は以下の通りである。

(10) イタリア語訳(アラトリステ)における部分冠詞の分布

	合計	複数	単数
主語	0	0	0
倒置主語	1	0	1
目的語	14	9	5
前置詞句	2	2	0
属詞	0	0	0
名詞文	0	0	0
その他	0	0	0
総計	17	11	6

上記3テキストを集計すると以下のようなになる。文法機能ごとに全体に対する割合も示す。

(11) イタリア語訳テキストにおける部分冠詞の分布の集計

	合計	複数	単数
主語	9 (4.5)	9 (5.3)	0
倒置主語	28 (13.9)	24 (14.2)	4 (12.1)
目的語	125 (61.9)	100 (59.2)	25 (75.8)
前置詞句	21 (10.4)	18 (10.7)	3 (9.1)
属詞	6 (3.0)	6 (3.6)	0
名詞文	6 (3.0)	6 (3.6)	0
その他	7 (3.5)	6 (3.6)	1 (3.0)
総計	202 (%)	169 (%)	33 (%)

それぞれに対応する例は以下の通りである。

- (12) a. perché degli esseri che s'amano sono davanti alla morte...
 どうして 愛し合ってる人たち(部分冠詞)が 死に直面するのか (主語)
- b. ...c'erano stati degli screzi...
 あった 異論(部分冠詞)が (倒置主語)
- c. ...e viene sempre a portarci dei regali...
 そして 来る いつも 私たちにもって 贈り物(部分冠詞)を (直接目的語)
- d. Viola stava talvolta lontana per dei mesi...
 ヴィオーラは いた 時おり 遠方に ~の間 何ヶ月もの(部分冠詞)
 (前置詞の目的語)
- e. Con tutto questo, furono degli ottimi genitori...
 こうしたことすべてを含めて 彼らは~だった この上ない親(部分冠詞)(属詞)
- f. ...: delle stuoie per ripararlo dall'aria, un baldacchino, un braciere.
 莫塵(部分冠詞) 風を防ぐための 天蓋 付き添い(名詞文)

g. ...stava delle ore a vederli lavorare...
 ～していた 何時間も (部分冠詞) 彼らを見て 仕事をするのを (副詞)

(11)に示された結果をフランス語の結果と比較してみると、以下のことが観察される。まず、フランス語に比べ、総数が極めて少ないということが言える。その理由は、後に述べる無冠詞との関係を考察することによって明らかになる。次に、イタリア語では主語の比率が極めて低いのに対して、倒置主語の比率が高くなっている。前置詞の目的語・属詞・名詞文の比率も低く、直接目的語にかなり偏った分布となっている。また、単数形では特定の文法機能に分布が偏っており、直接目的語が圧倒的に高い割合を示している。主語については全く観察されないという点もフランス語との大きな違いである。

このように部分冠詞の分布が偏っているのは、部分冠詞が旧情報に対応する要素を限定するのが難しいという性質によるものと考えられる。1.2.1 でみたSensini(1997)が述べているように、部分冠詞は不定の要素を限定するのが本来の機能である。不定の要素は新情報として提示されることが多く、旧情報となる場合は少ない。一方で、文法機能と情報の新・旧の対応を考えると、動詞に先行する主語は旧情報となるのに対して、動詞に後続する直接目的語や倒置主語は新情報となるという傾向が見られる。不定と新情報は親和性が高いために、部分冠詞は直接目的語や倒置主語に多く見られ、主語にはあまり見られないのである¹⁰。このような傾向はフランス語の部分冠詞にはそれ程強く見られないものであった。これは、イタリア語の部分冠詞がフランス語のそれよりも用いられる環境が限られていることを示している。この特徴は、後に述べる部分冠詞の冠詞としてのステータスが両言語において根本的に異なっていることに起因すると考えられる。

3. フランス語とイタリア語の部分冠詞の対応

本節では、フランス語とイタリア語の部分冠詞の対応関係について考察を進める。一方の言語の部分冠詞が他方においてどのような形式に対応しているかを見ることによって、両言語における部分冠詞の機能の違いを明らかにする。

3. 1. フランス語の部分冠詞のイタリア語における対応表現

まず、フランス語の部分冠詞がイタリア語においてどのように対応しているかを観察する。フランス語原典における部分冠詞が、イタリア語訳において対応している形式の分布は以下に示される。(13)は、フランス語原典「人間の条件」における部分冠詞がイタリア語訳においてどのような形式で表されているかを示している。最初の表は部分冠詞全体について示したもので、二つ目は部分冠詞の複数形と単数形に分けて示

¹⁰ 査読者から、新情報との親和性という点では部分冠詞より無冠詞の方が親和性が高いと考えられるので、部分冠詞が用いられるには他の要因が考えられるのではないかという指摘があった。新情報との親和性がどの程度のものかという問題は容易には解答できないものである。部分冠詞と無冠詞に関していえば、両者は不定の機能を持つという点では同等であり、どちらかがより新情報との親和性が高いということは本稿での考察だけでは決定できない。ただ、部分冠詞には不定の数量を含意するという特徴があり、また不定でも話者がその指示対象を明確に想定している特定のな名詞を限定するという、無冠詞には見られない機能がある(Renzi et al. 2001:388)。このような性質が、無冠詞ではなく部分冠詞の生起を決定づけていると考えることができる。

したものである。

(13) フランス語原典（人間の条件）の部分冠詞がイタリア語に翻訳された形式の分布

伊語	合計	部分	無冠	不定	定冠	他
主語	47	4	26	0	9	8
倒主	61	20	25	1	7	8
目的	191	47	91	10	27	16
前置	126	9	90	4	12	11
属詞	39	2	34	2	0	1
名詞	71	5	56	1	2	7
他	9	3	6	0	0	0
総計	544	90	328	18	57	51

仏語	複数						単数					
	合計	部分	無冠	不定	定冠	他	合計	部分	無冠	不定	定冠	他
伊語	46	4	26	0	8	8	1	0	0	0	1	0
主語	58	19	25	0	7	7	3	1	0	1	0	1
倒主	152	38	78	0	22	14	39	9	13	10	5	2
前置	117	7	84	3	12	11	9	2	6	1	0	0
属詞	34	2	32	0	0	0	5	0	2	2	0	1
名詞	63	5	49	1	1	7	8	0	7	0	1	0
他	7	2	5	0	0	0	2	1	1	0	0	0
総計	477	77	299	4	50	47	67	13	29	14	7	4

(14)は、イタリア語の小説「木のぼり男爵」のフランス語訳における部分冠詞がイタリア語原典においてどのような形式で表されているかを示している。

(14) 仏語訳（木のぼり男爵）の部分冠詞が伊語原典に対応する形式の分布

伊語	合計	部分	無冠	不定	定冠	他
主語	26	3	10	1	4	8
倒主	50	4	32	4	7	3
目的	289	45	195	5	34	10
前置	205	5	161	6	22	11
属詞	38	3	32	2	0	1
名詞	37	1	31	0	4	1
他	28	2	20	0	3	3
総計	673	63	481	18	74	37

仏語	複数						単数					
	合計	部分	無冠	不定	定冠	他	合計	部分	無冠	不定	定冠	他
伊語	26	3	10	1	4	8	0	0	0	0	0	0
主語	47	3	32	3	7	2	3	1	0	1	0	1
倒主	270	41	183	5	31	10	19	4	12	0	3	0
目的	195	5	153	6	20	11	10	0	8	0	2	0
前置	37	3	31	2	0	1	1	0	1	0	0	0
属詞	32	1	26	0	4	1	5	0	5	0	0	0
名詞	28	2	20	0	3	3	0	0	0	0	0	0
他	635	58	455	17	69	36	38	5	26	1	5	1
総計												

(15)は、スペイン語の小説「アラトリステ」のフランス語訳における部分冠詞がイタリア語訳においてどのような形式で表されているかを示している。

(15) 仏語訳（アラトリステ）の部分冠詞が伊語訳に対応する形式の分布

伊語	合計	部分	無冠	不定	定冠	他
主語	8	0	3	0	4	1
倒主	21	0	15	1	1	4
目的	86	9	61	0	8	8
前置	75	0	54	3	14	4
属詞	16	0	15	0	0	1
名詞	14	0	12	1	0	1
他	3	0	2	0	1	0
総計	223	9	162	5	28	19

仏語	複数						単数					
	合計	部分	無冠	不定	定冠	他	合計	部分	無冠	不定	定冠	他
伊語	8	0	3	0	4	1	0	0	0	0	0	0
主語	21	0	15	1	1	4	0	0	0	0	0	0
倒主	84	8	60	0	8	8	2	1	1	0	0	0
目的	67	0	47	3	13	4	8	0	7	0	1	0
前置	15	0	14	0	0	1	1	0	1	0	0	0
属詞	14	0	12	1	0	1	0	0	0	0	0	0
名詞	3	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0
他	212	8	153	5	27	19	11	1	9	0	1	0
総計												

上記3テキストを集計すると以下のようなになる。形式ごとに各文法機能の占める割合も示す。

(16) フランス語テキストの部分冠詞がイタリア語テキストに対応する形式の分布

a. 全体

伊語	合計	部分冠詞	無冠詞	不定冠詞	定冠詞	他
主語	81 (5.6)	7 (4.3)	39 (4.0)	1 (2.4)	17 (10.7)	17 (15.9)
倒主	132 (9.2)	24 (14.8)	72 (7.4)	6 (14.6)	15 (9.4)	15 (14.0)
目的	566 (39.3)	101 (62.3)	347 (35.7)	15 (36.6)	69 (43.4)	34 (31.8)
前置	406 (28.2)	14 (8.6)	305 (31.4)	13 (31.7)	48 (30.2)	26 (24.3)
属詞	93 (6.5)	5 (3.1)	81 (8.3)	4 (9.8)	0	3 (2.8)
名詞	122 (8.5)	6 (3.7)	99 (10.2)	2 (4.9)	6 (3.8)	9 (8.4)
他	40 (2.8)	5 (3.1)	28 (2.9)	0	4 (2.5)	3 (2.8)
総計	1440 (%)	162 (%)	971 (%)	41 (%)	159 (%)	107 (%)

b. 複数形

伊語	合計	部分冠詞	無冠詞	不定冠詞	定冠詞	他
主語	80 (6.0)	7 (4.9)	39 (4.3)	1 (3.8)	16 (11.0)	17 (16.7)
倒主	126 (9.5)	22 (15.4)	72 (7.9)	4 (15.4)	15 (10.3)	13 (12.7)
目的	506 (38.2)	87 (60.8)	321 (35.4)	5 (19.2)	61 (41.8)	32 (31.4)
前置	379 (28.6)	12 (8.4)	284 (31.3)	12 (46.2)	45 (31.0)	26 (25.5)
属詞	86 (6.5)	5 (3.5)	77 (8.5)	2 (7.7)	0	2 (2.0)
名詞	109 (8.2)	6 (4.2)	87 (9.6)	2 (7.7)	5 (3.4)	9 (8.8)
他	38 (2.9)	4 (2.8)	27 (3.0)	0	4 (2.7)	3 (2.9)
総計	1324 (%)	143 (%)	907 (%)	26 (%)	146 (%)	102 (%)

c. 単数形

伊語	合計	部分冠詞	無冠詞	不定冠詞	定冠詞	他
主語	1 (0.9)	0	0	0	1 (7.7)	0
倒主	6 (5.2)	2 (10.5)	0	2 (13.3)	0	2 (40)
目的	60 (51.7)	14 (73.7)	26 (40.6)	10 (66.7)	8 (61.5)	2 (40)
前置	27 (23.3)	2 (10.5)	21 (32.8)	1 (6.7)	3 (23.1)	0
属詞	7 (6.0)	0	4 (6.3)	2 (13.3)	0	1 (20)
名詞	13 (11.2)	0	12 (18.8)	0	1 (7.7)	0
他	2 (1.7)	1 (5.3)	1 (1.6)	0	0	0
総計	116 (%)	19 (%)	64 (%)	15 (%)	13 (%)	5 (%)

この中で、不可算名詞と可算名詞¹¹との対比を考察するために、不可算名詞に限定してみると、フランス語の部分冠詞によって限定される名詞がイタリア語で名詞に対応

¹¹ イタリア語やフランス語では可算・不可算という名詞のカテゴリー分けがなされず、名詞が指示する実体が連続的であるか非連続的であるかによって数が決定される。同じ名詞であっても連続的な実体を指す場合と非連続的な実体を指す場合の両方があるため、不可算名詞という用語は一般に用いられない。しかし、議論の簡略化のために、本稿では便宜的に可算名詞・不可算名詞という名称を用いることとする。

している例は 80 例観察される。このうちイタリア語で無冠詞となっているのは 52 例で、最も多いのは直接目的語の 25 例(48.1%)、これに前置詞句 10 例(19.2%)、名詞文 10 例(同)、属詞 5 例(9.6%)と続く。イタリア語でも部分冠詞となっているのは 17 例で、このうち直接目的語が 12 例(70.6%)と圧倒的に多い。イタリア語で定冠詞となっている例は 9 例で、最も多いのはやはり直接目的語の 5 例である。ここから、不可算名詞の場合、可算名詞よりも直接目的語として生起する割合が高いことが分かる。

また、対応において数の変換が見られる例は、フランス語で部分冠詞によって限定される単数形の名詞がイタリア語で複数形の名詞に対応している例が 11 例、フランス語で部分冠詞によって限定される複数形の名詞がイタリア語で単数形の名詞に対応している例が 57 例である。前者については 8 例がイタリア語で無冠詞となっているのに対し、後者ではイタリア語において不定冠詞となっているのが 25 例、無冠詞となっているのが 15 例、定冠詞となっているのが 8 例となっている。この事実は、イタリア語において複数形における部分冠詞の使用がそれほど多くないことを示唆している。これらの例における文法機能については、イタリア語で無冠詞及び定冠詞となっている例では目的語である場合が最も多く、無冠詞単数形で 4 例、無冠詞複数形で 9 例、定冠詞複数形で 6 例となっており、全体の傾向に合致していると言える。不定冠詞については最も多いのは前置詞の 11 例である¹²。

以下に、フランス語の部分冠詞がイタリア語の他の形式に対応している例を示す。

(17) a. ..., comme si d'immenses ombres fussent venues parfois approfondir

まるで 巨大な影 (部分冠詞) が 来た 時々 深めに

la nuit.

夜を

b. ..., come se ombre immense sopraggiungessero di tratto in tratto

まるで 巨大な影 (無冠詞) が 来た 時々

ad incupire la notte.

暗くしに 夜を

(主語)

(18) a. Dans son poids, le corps, prêt à retomber à droite ou à gauche, trouvait

その重みの中に 肉体は 右にあるいは左に倒れそうになって 見出していた

encore de la vie.

なおも 生命 (部分冠詞) を

b. Il corpo, in procinto di cadere a destra o a sinistra, trovava ancora

肉体は 右にあるいは左に倒れそうになって 見出していた なおも

una certa vita nel suo peso.

いくらかの生命 (不定冠詞) を その重みの中に

(直接目的語)

(19) a. ...il y aurait, hélas ! des ensuite...

あることだろう ああ 続き (部分冠詞) が

¹² 可算名詞・不可算名詞の区別、並びに対応において数の変換が見られる例の観察の有効性は、査読者の指摘によるものである。

b. ...purtroppo ci sarebbero stati i postumi...

ああ あることだろう 影響(定冠詞)が (倒置主語)

(20) a. Mais qu'elle discutât en ce moment sur des droits

だが ~こと 彼女が 議論する 今 ~について 権利 (部分冠詞)

la séparait de lui davantage.

彼女を 切り離していた 彼から いっそう

b. ..., ma il fatto che essa discutesse sui suoi diritti

だが ~という事実は 彼女が 議論する ~について 自分の権利 (所有形容詞)

la separava ancor più da lui.

彼女を 切り離していた いっそう 彼から (前置詞の目的語)

(16)の結果から、フランス語の部分冠詞に対応するイタリア語の表現形式について、以下のような結果が得られる。

1. 部分冠詞が対応する場合、他の場合に比べて直接目的語の比率が圧倒的に高い。
2. 無冠詞・不定冠詞・定冠詞が対応する場合、前置詞の目的語の比率が比較的高い。
3. 定冠詞が対応する場合、主語の比率が他の場合に比べて高い。

(16)の結果を、文法機能ごとにそれぞれどの形式がどのような割合を占めているかという観点から捉えなおすと以下ようになる。

(21) フランス語の部分冠詞がイタリア語に対応する場合の、文法機能ごとの割合(%)

伊語	部分	無冠	不定	定冠	他
主語	8.6	48.1	1.2	21.0	21.0
倒主	18.2	54.5	4.5	11.4	11.4
目的	17.8	61.3	2.7	12.2	6.0
前置	3.4	75.1	3.2	11.8	6.4
属詞	5.4	87.1	4.3	0	3.2
名詞	4.9	81.1	1.6	4.9	7.4
他	12.5	70	0	10	7.5
総計	11.3	67.4	2.8	11.0	7.4

このデータからは、以下の結果が得られる。

1. 全体では、無冠詞の割合が極めて高く、部分冠詞に対応している割合は予想外に低い。それ以外では定冠詞の割合が予想以上に高い。
2. 主語の場合、定冠詞の比率が極めて高い。
3. 倒置主語の場合、部分冠詞の比率が高く、無冠詞の比率が他に比べてかなり低い。
4. 直接目的語の場合、部分冠詞の比率が比較的高いのにに対し、無冠詞の比率が他に比べると低いと言える。
5. 前置詞の目的語の場合、無冠詞の比率が高いのにに対し、部分冠詞の比率が極端に低い。
6. 属詞・名詞文の場合、無冠詞の比率が圧倒的に高い。

以上の結果を総括すると、次のことが言える。まず、イタリア語の部分冠詞はフランス語の部分冠詞のほんの一部にしか対応しておらず、その生起する割合が著しく低い。一方、フランス語の部分冠詞の相当数にイタリア語では無冠詞が対応する。このことは、フランス語の部分冠詞の機能を、イタリア語では無冠詞と部分冠詞が共同で担っているということを示している。その中で、倒置主語と直接目的語においてイタリア語の部分冠詞が対応する割合が高いので、イタリア語ではこの二つの文法機能と部分冠詞の間に親和性があるということになる。また、不定の要素の指示という、部分冠詞と共通する特性をもつ不定冠詞が対応している例が予想以上に少なく、むしろ対立する機能を有する定冠詞が特に主語において多く対応している。これは、定・不定という区別よりも文における情報構造が翻訳の際に優先されている結果であると考えられることができる。つまり、主語の位置は一般に旧情報に対応するので、旧情報を示すのに適切な定冠詞が用いられるということである。

3. 2. イタリア語の部分冠詞のフランス語における対応表現

次に、イタリア語の部分冠詞がフランス語においてどのように対応しているかを観察する。イタリア語原典における部分冠詞が、フランス語訳において対応している形式の分布は以下に示される。(22)は、イタリア語原典「木のぼり男爵」における部分冠詞がフランス語訳においてどのような形式で表されているかを示している。

(22) 伊語原典（木のぼり男爵）の部分冠詞が仏語に翻訳された形式の分布

仏語	合計	部分	無冠	不定	定冠	他
主語	2	2	0	0	0	0
倒主	7	4	0	1	2	0
目的	56	47	5	1	3	0
前置	4	3	0	1	0	0
属詞	3	3	0	0	0	0
名詞	1	1	0	0	0	0
他	3	3	0	0	0	0
総計	76	63	5	3	5	0

伊語	複数						単数					
	合計	部分	無冠	不定	定冠	他	合計	部分	無冠	不定	定冠	他
主語	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0
倒主	6	4	0	0	2	0	1	0	0	1	0	0
目的	53	44	5	1	3	0	3	3	0	0	0	0
前置	4	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
属詞	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
名詞	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
他	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
総計	71	59	5	2	5	0	5	4	0	1	0	0

(23)は、フランス語の小説「人間の条件」のイタリア語訳における部分冠詞がフランス語原典においてどのような形式で表されているかを示している。

(23) 伊語訳（人間の条件）の部分冠詞が仏語原典に対応する形式の分布

仏語	合計	部分	無冠	不定	定冠	他
主語	12	11	0	0	0	1
倒主	12	12	0	0	0	0
目的	54	48	1	0	3	2
前置	11	9	1	0	0	1
属詞	2	2	0	0	0	0
名詞	5	5	0	0	0	0
他	4	3	1	0	0	0
総計	100	90	3	0	3	4

伊語	複数						単数					
	合計	部分	無冠	不定	定冠	他	合計	部分	無冠	不定	定冠	他
主語	11	10	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0
倒主	12	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
目的	40	38	1	0	1	0	14	10	0	0	2	2
前置	9	7	1	0	0	1	2	2	0	0	0	0
属詞	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
名詞	5	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
他	3	2	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0
総計	82	76	3	0	1	2	18	14	0	0	2	2

(24)は、スペイン語の小説「アラトリステ」のイタリア語訳における部分冠詞がフランス語訳においてどのような形式で表されているかを示している。

(24) 伊語訳（アラトリステ）の部分冠詞が仏語訳に対応する形式の分布

仏語	合計	部分	無冠	不定	定冠	他
主語	0	0	0	0	0	0
倒主	0	0	0	0	0	0
目的	11	9	0	0	1	1
前置	2	0	1	0	0	1
属詞	0	0	0	0	0	0
名詞	0	0	0	0	0	0
他	0	0	0	0	0	0
総計	13	9	1	0	1	2

伊語	複数						単数					
	合計	部分	無冠	不定	定冠	他	合計	部分	無冠	不定	定冠	他
主語	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
倒主	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
目的	8	7	0	0	1	0	3	2	0	0	0	1
前置	2	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0
属詞	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
名詞	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
総計	10	7	1	0	1	1	3	2	0	0	0	1

上記3テキストを集計すると以下ようになる。形式ごとに各文法機能の占める割合も示す¹³。

(25) イタリア語テキストの部分冠詞がフランス語テキストに対応する形式の分布

a. 全体

仏語	合計	部分冠詞	無冠詞	不定冠詞	定冠詞	他
主語	14 (7.4)	13 (8.0)	0	0	0	1 (16.7)
倒主	19 (10.1)	16 (9.9)	0	1 (33.3)	2 (22.2)	0
目的	121 (64.0)	104 (64.2)	6 (66.7)	1 (33.3)	7 (77.8)	3 (50)
前置	17 (9.0)	12 (7.4)	2 (22.2)	1 (33.3)	0	2 (33.3)
属詞	5 (2.6)	5 (3.1)	0	0	0	0
名詞	6 (3.2)	6 (3.7)	0	0	0	0
他	7 (3.7)	6 (3.7)	1 (11.1)	0	0	0
総計	189 (%)	162 (%)	9 (%)	3 (%)	9 (%)	6 (%)

b. 複数形

仏語	合計	部分冠詞	無冠詞	不定冠詞	定冠詞	他
主語	12 (7.6)	11 (7.7)	0	0	0	1 (33.3)
倒主	18 (11.0)	16 (11.3)	0	0	2 (28.6)	0
目的	101 (62.0)	89 (62.7)	6 (66.7)	1 (50)	5 (71.4)	0
前置	15 (9.2)	10 (7.0)	2 (22.2)	1 (50)	0	2 (66.7)
属詞	5 (3.1)	5 (3.5)	0	0	0	0
名詞	6 (3.7)	6 (4.2)	0	0	0	0
他	6 (3.7)	5 (3.5)	1 (11.1)	0	0	0
総計	163 (%)	142 (%)	9 (%)	2 (%)	7 (%)	3 (%)

¹³ この中で、対応において数の変換が見られる例は、イタリア語で部分冠詞によって限定される複数形の名詞がフランス語で単数形の名詞に対応している例が5例のみ、イタリア語で部分冠詞によって限定される単数形の名詞がフランス語で複数形の名詞に対応している例は3例のみであった。今回の調査ではデータ数が少ないので、このようなパターンの一般的傾向を見出すことはできない。

c. 単数形

仏語	合計	部分冠詞	無冠詞	不定冠詞	定冠詞	他
主語	2 (7.7)	2 (10.0)	0	0	0	0
倒主	1 (3.8)	0	0	1 (100)	0	0
目的	20 (76.9)	15 (75.0)	0	0	2 (100)	3 (100)
前置	2 (7.7)	2 (10.0)	0	0	0	0
属詞	0	0	0	0	0	0
名詞	0	0	0	0	0	0
他	1 (3.8)	1 (5.0)	0	0	0	0
総計	26 (%)	20 (%)	0	1 (%)	2 (%)	3 (%)

この中で、不可算名詞に限定してみると、イタリア語の部分冠詞によって限定される名詞がフランス語で名詞に対応している例は 19 例観察される。このうちフランス語で部分冠詞となっている例が 17 例であり、その中で圧倒的に高い割合を示すのが直接目的語の 12 例(70.6%)である。この結果は、可算名詞に比べ、直接目的語として生起する割合が高いことを示している。これは、3.1 で観察した結果と同様の傾向である。

以下に、フランス語の部分冠詞がイタリア語の他の形式に対応している例を示す。

- (26) a. ...sebbene lui, poverino, ogni tanto le portasse
それなのに 彼は かわいそうに 時折 彼女に 持ってきたのだった
dei mazzi di fiori o delle pelli pregiate.
花束 (部分冠詞) や貴重な毛皮 (部分冠詞) を
- b. ...le pauvre garçon, pourtant, lui apportait régulièrement
そのかわいそうな少年は それなのに 彼女に 持ってきたのだった 定期的に
bouquets de fleurs et fourrures de valeur.
花束 (無冠詞) や貴重な毛皮 (無冠詞) を (直接目的語)
- (27) a. ...vivo da molti anni per degli ideali
私は生きている 何年もの間 ~のために 理想 (部分冠詞)
che non saprei spiegare neppure a me stesso...
説明しかねる 自分自身でも
- b. ...il y a bien des années que je vis pour un idéal
何年もの間 私は生きている ~のために 理想 (不定冠詞)
que je ne saurais pas m'expliquer...
自分自身でも説明しかねる (前置詞の目的語)
- (28) a. Pronunciava anche delle apologie degli uccelli...
述べるのであった 鳥たちの弁論 (部分冠詞) も
- b. ...il commença à prononcer l'apologie des oiseaux...
彼は述べ始めた 鳥たちの弁論 (定冠詞) を (直接目的語)
- (29) a. ...forse la rivoluzione avrebbe ricacciato nella sua solitudine
おそらく 革命は 投げ出そうとしている 彼の孤独の中に

con dei ricordi di omicidio.

～とともに 殺人の思い出 (部分冠詞)

b. ...la Révolution allait peut-être rejeter à sa solitude

革命は おそらく投げ出そうとしている 彼の孤独の中に

avec ses souvenirs d'assassinats.

～とともに 彼の殺人の思い出 (所有形容詞) (前置詞の目的語)

(25)から、他の文法機能においても観察されるものの、直接目的語の比率が極めて高いことが分かる。(25)の結果を、文法機能ごとにそれぞれどの形式がどのような割合を占めているかという観点から捉えなおすと以下ようになる。

(30) イタリア語の部分冠詞がフランス語に対応する場合の、文法機能ごとの割合(%)

仏語	部分	無冠	不定	定冠	他
主語	92.9	0	0	0	7.1
倒主	84.2	0	5.3	10.5	0
目的	86.0	4.6	0.8	5.8	2.5
前置	70.6	11.8	5.9	0	11.8
属詞	100	0	0	0	0
名詞	100	0	0	0	0
他	85.7	14.3	0	0	0
総計	85.7	4.8	1.6	4.8	3.2

このデータからは、以下の結果が得られる。

1. どの文法機能においても圧倒的に部分冠詞の比率が高い。
2. 倒置主語と直接目的語の場合、定冠詞の割合が比較的高い。
3. 前置詞の目的語の場合、他の形式で対応する比率が若干高い。

以上の結果を総括すると、次のことが言える。まず、イタリア語の部分冠詞の大部分にフランス語では部分冠詞が対応する。また、フランス語からイタリア語への対応で見られた場合と同じ傾向として、イタリア語の部分冠詞にフランス語の定冠詞が不定冠詞よりも多く対応している。このことから、両言語の部分冠詞は定冠詞ともある程度の連続性があると言える。

4. 結論

本稿では、フランス語とイタリア語の部分冠詞が、それぞれ他の言語でどのような形式で対応しているかを詳細に観察し、考察を進めてきた。翻訳のもつ性質上、全く同じ形式で対応するとは限らず、訳者の表現方法によって対応する形式が変わってくることは往々にして見られることである。その点を勘案しても、両言語の部分冠詞の特徴の差異が明らかになったと言える。

まず第一点としてあげられるのは、フランス語の部分冠詞は極めて広い範囲で生起するのに対して、イタリア語の部分冠詞はその生起がかなり限られるということであ

る。これは、フランス語においては部分冠詞が冠詞体系において重要な位置を占めていることを示している。これに対してイタリア語では、フランス語に比べて無冠詞の占める割合が高いことが窺え、部分冠詞が冠詞体系においてそれ程重要な位置を占めていないと言える。部分冠詞が生起してしかるべき場合に無冠詞が用いられる例が少なからず存在するという事は、部分冠詞が冠詞としても確固たるステータスをもたず、量化詞的な性質をもっていることを意味している。

次に指摘できるのは、両言語において部分冠詞が他の冠詞と機能上連続性をもっているという点である。フランス語の部分冠詞がイタリア語において他の冠詞によって表現されている例、また逆にイタリア語の部分冠詞がフランス語において他の冠詞によって表現されている例が一定の割合で存在するという事は、それぞれの冠詞の機能が完全に分離されているのではなく、重なり合う部分も含めて連続的に機能が配分されていることを示している。

本稿の分析で残された問題としてあげられるのは、イタリア語の部分冠詞がフランス語において倒置主語や直接目的語で定冠詞が現れやすいのに対して、フランス語の部分冠詞が倒置主語や直接目的語で部分冠詞の比率が高いという傾向である。これはイタリア語において部分冠詞の定冠詞的特性が優勢であり、逆にフランス語では部分冠詞が無冠詞的特性が優っているという可能性を示している¹⁴。これは極めて興味深くかつ重要な問題であるが、この問題を解決するには定冠詞と無冠詞の分布をそれぞれ詳細に検討した上で、両言語における部分冠詞・定冠詞・無冠詞の機能的関係を明確にしなければならない。これにより、部分冠詞と無冠詞・定冠詞との関係、更には決定詞の体系におけるそれぞれの位置づけをより明らかにすることができる。この課題については、稿を改めて論じることとしたい。

参考文献

- Andorno, Cecilia (1999), *Dalla grammatica alla linguistica*, Paravia, Torino.
- Dardano, Maurizio and Petro Trifone (1997), *La nuova grammatica della lingua italiana*, Zanichelli, Bologna.
- Deloffre, Frédérique et Jacqueline Hellegouarc'h (1988), *Éléments de linguistique française*, Editions C.D.U. et SEDES réunis, Paris.
- Grevisse, Maurice (1993), *Le bon usage*, Duculot, Paris.
- Hollerbach, Wolf (1994), *The Syntax of Contemporary French*, University Press of America, Lanham.
- Judge, Anne and F. G. Healey (1995), *A Reference Grammar of Modern French*, NTC Publishing Group, Lincolnwood.
- Leeman, Danielle (2004), *Les déterminants du nom en français : syntaxe et sémantique*, Presses Universitaires de France, Paris.
- Maiden, Martin and Cecilia Robustelli (2000), *A Reference Grammar of Modern Italian*, Arnold,

¹⁴ 査読者からの指摘による。

London.

Martinet, André (1979), *Grammaire fonctionnelle du français*, Didier, Paris.

Price, Glanville (2003), *A Comprehensive French Grammar*, Blackwell Publishing, Malden.

Renzi, Lorenzo et al. (2001), *Grande grammatica italiana di consultazione*, il Mulino, Bologna.

Sensini, Marcello (1997), *La grammatica della lingua italiana*, Oscar Mondadori, Milano.

Serianni, Luca (1997), *Italiano*, Garzanti Editore, Milano.

Wagner, Robert Léon and Jacqueline Pinchon (1991), *Grammaire du Français classique et moderne*,
Hachette, Paris.

執筆者紹介

所属：北海道大学大学院文学研究科西洋言語学講座

E-mail： fujitat@let.hokudai.ac.jp

専門分野：統語論、ロマンス語学